

# がん専門病院歯科で行う周術期口腔ケア方法の標準化に向けた 調査および検討

がん研究会有明病院 歯科

部長 富塚 健

(共同研究者)

国立がん研究センター中央病院 歯科

医長 上野 尚雄

国立がん研究センター東病院 歯科

医師 小西 哲仁

静岡県立静岡がんセンター 歯科口腔外科

部長 百合草 健圭志

宮城県立がんセンター 歯科

医師 臼渕 公敏

四国がんセンター 歯科

医師 石川 徹

## はじめに

要介護高齢者に対して口腔ケアを行うことにより、肺炎や発熱のリスクが減少したとの報告(T. Yoneyama et al. *Lancet* 1999)などにより、口腔ケアの有益性が次第に広く認められるようになってきた。がんの周術期においても、とくに頭頸部がん、食道がんなどの手術患者においては、術前から口腔ケアを行うことによって肺炎などの術後合併症のリスクを減らすことができるとの報告がいくつかの施設からなされている。

しかしながら、実際の臨床における口腔ケアは人材確保の難しさや時間的制限などに加えて、エビデンスに裏打ちされた方法、手順が確立されていないことにより各施設では必ずしも効果的な口腔ケアが実施されているとはいえない状況である。

そこで共同研究者が所属する施設を含む6つのがん専門病院歯科を中心に具体的な口腔ケアの実施状況を調査し、さらにこれまでに出版されているがん周術期の口腔ケアに関する報告を精査し、がん専門病院における周術期の口腔ケアに関するガイドラインに準ずるものを確立することを最終目的とする。

まず初めに、当院歯科におけるがん周術期口腔機能管理について調査することとした。がん治療に関連する、いわゆる口腔ケアをふくむ周術期口腔機能管理は手術に伴う呼吸器合併症の発症を抑制する他、化学療法や頭頸部放射線治療に伴う口腔有害事象（口腔粘膜炎、口腔乾燥、口腔感染症、味覚障害など）の症状緩和が期待される。口腔有害事象の中で口腔粘膜炎は、口腔内の痛みによる苦痛が大きく、患者の経口摂取に大きく影響を及ぼし、QOL低下に直結する可能性があるため、この予防および症状緩和、二次的感染の抑制は極めて重要であり、適切な対処が求められる。そこで、6つのがん専門病院の歯科医師による検討を経て、医療者向けの口腔粘膜炎に関する冊子を作成し、関連施設や関連する職種の医療者へ

配布することとした。

## 結 果

### ・がん研有明病院における周術期口腔機能管理の現状について：

2013年1月から2014年12月までに当院において院内医科から歯科へ診療依頼があった全3,421件のうち、周術期口腔機能管理に関する2,592件を対象とし、1)性別、年齢 2)診療科別の依頼数および依頼を受けた時期 3)がん治療内容について調査した。

#### 1) 性別、年齢

性別は男性1,541件(59.5%)、女性1,051件(40.5%)で、年齢は16～90歳で平均年齢は62.1歳であった。

#### 2) 診療科別の依頼数および依頼を受けた時期

頭頸科が758件と最も多く、全体の29.2%を占めていた。以下、次のような順であった。消化器外科354件(13.7%)、血液腫瘍科285件(11%)、放射線治療科258件(10%)、婦人科246件(9.5%)、乳腺科161件(6.2%)、呼吸器内科149件(5.7%)、消化器内科121件(4.7%)、総合腫瘍科117件(4.5%)、泌尿器科86件(3.3%)、緩和治療科35件(1.4%)、整形外科19件(0.7%)、麻酔科2件(0.1%)、総合内科1件(0.04%)。(図1)

依頼を受けた時期は、がん治療開始前が1864件で70%以上を占め、がん治療後の依頼は728件であった。

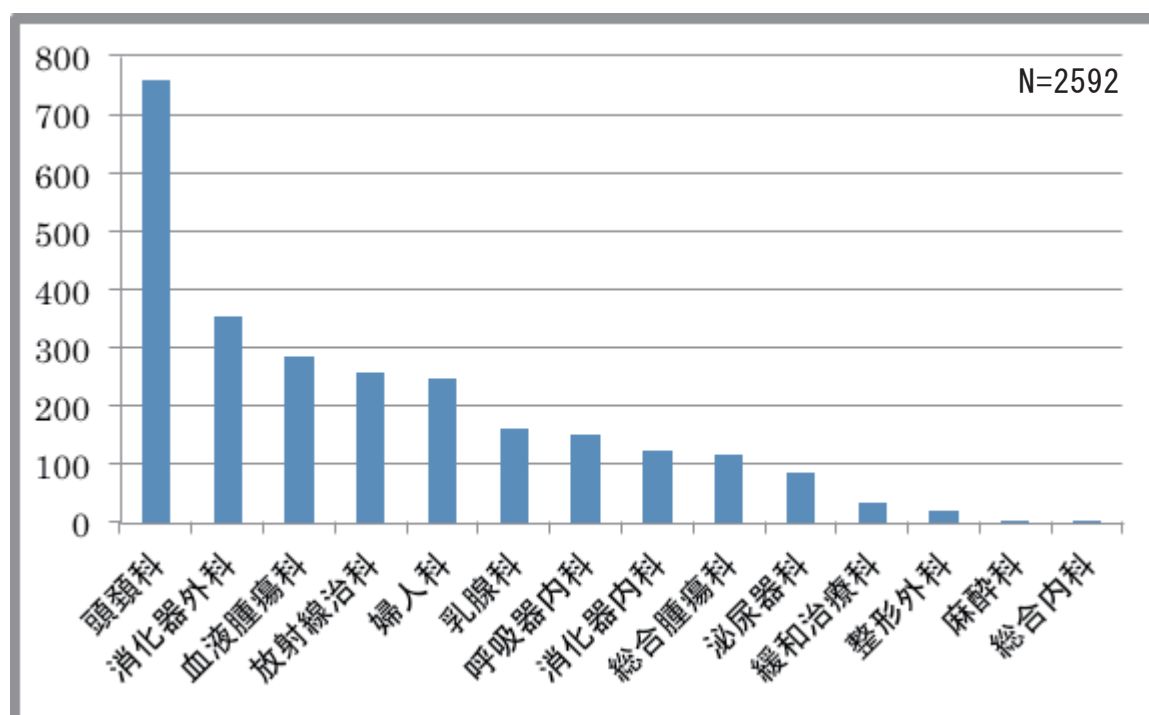


図1 診療科別依頼数

### 3) がん治療内容について

化学療法1,205件(46.5%)、手術826件(31.9%)、化学放射線治療303件(11.7%)、放射線治療209件(8.1%)であった。(第2表)手術に関連する依頼(手術前)について、内訳は頭頸科が580件(70.2%)、消化器外科が246件(29.8%)であった。(図2)

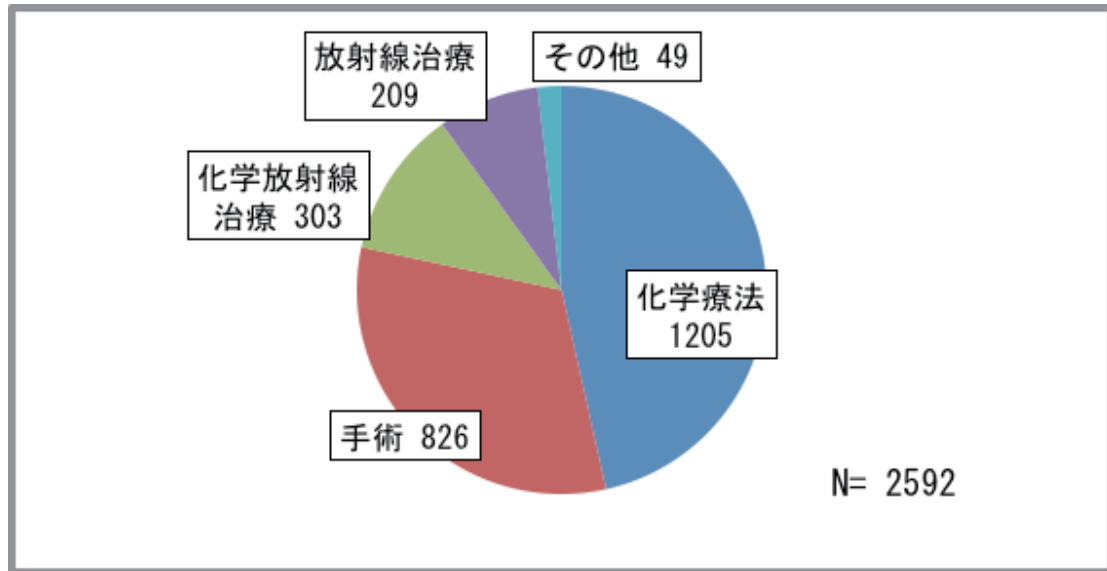


図2 がん治療内容

#### ・口腔粘膜炎に関する資料作成に関して：

比較的診療内容が類似していると思われる、がん専門病院6施設に勤務する歯科医師が2015年1月より8月までに7回のミーティングを行い、口腔粘膜炎に関する冊子の構成を検討した。内容は、口腔粘膜の解剖、口腔粘膜の観察方法、口腔粘膜炎の病態、口腔粘膜炎の評価方法とし、口腔内写真等の画像はすべて各施設で撮影されたものから選択した。(図3)また、歯科医療者向けにセミナーを開催した(がんの歯科支持療法懇話会 ～がん患者への歯科支持療法を再考する～ 2015年9月5日 於 国立がん研究センター内 国際交流会館大ホール)。



図3

## 考 察

周術期口腔機能管理の有益性については、広く認知されつつあるが、その方法や介入時期などについては施設による差が認められ、がん専門病院においても同様と考えられる。

当院での周術期口腔機能管理に関する院内他科からの依頼は、頭頸科、消化器外科（食道がん）が多く、他施設と同様の傾向がみられた。これは、手術後の創部感染や呼吸器合併症の予防に対する周術期の口腔機能管理の有効性が、ある程度認識されているためと思われた。さらに、これらの症例に関して当院では、術前の検査や歯科への併診がシステム化されており、予め当該科において口腔内診査、歯科治療の必要性が患者に説明されており、比較的早い時期に歯科受診がなされていると考えられた。

がん治療内容では、化学療法に関連したものが最も多かった。使用する薬剤によって口腔粘膜炎等の有害事象の発現するリスクは異なるため、結果として血液腫瘍科から多くの依頼を受けていた。また、化学療法開始後に初めて受診の依頼を受ける場合もあり、口腔粘膜炎等の有害事象への適切な対応が求められていることがうかがわれた。

今回は複数のがん専門病院での周術期口腔機能管理の実態調査を比較するには至らなかったが、口腔関連有害事象の中でも最も苦痛が大きいと思われる口腔粘膜炎に関して、当該施設代表者の意見交換による「口腔粘膜炎評価マニュアル」を作成した。外来での化学療法の頻度は今後増加してゆくことが見込まれるが、これも踏まえて、経口摂取を妨げる可能性のある口腔粘膜炎への適切な対処はさらに重要になると思われる。この際、医療者による的確な口腔粘膜の評価は必須であり、作成した冊子は関連施設の医療者へ配布し、啓発活動の一助としてゆきたいと考えている。

## 要 約

今回、周術期口腔ケア方法の標準化に向けた調査および検討に先だって、当院の周術期口腔機能管理の実態を調査した。また、複数のがん専門病院の歯科医師による「口腔粘膜炎評価マニュアル」を作成した。

## 文 献

1. Yoneyama T et al.; Oral care and pneumonia. Lancet 354:515 1999
2. 坪佐恭宏 他; 食道癌に対する開胸開腹食道切除再建術における術後肺炎予防. 日本感染症学会雑誌 3 (1):43-47b 2006
3. 片岡智子 他; 口腔癌手術後肺炎に対する口腔ケアの予防効果について. 日本口腔診断学会雑誌 21 (1):1-6 2008